外来化学療法室における患者教育

―「私のちりょう日記」を活用しての評価―

外来化学療法室 ○清水典江　中村万紀子
林京子（西病棟８階）　赤坂弘子（東病棟６階）

key word 外来化学療法　患者教育　患者用記録用紙

はじめに

外来化学療法を安全に施行するために最も重要なことは、患者自身が現在の病状や治療を理解することである。抗がん剤の副作用を医療者のいない自宅で体験し、自らが主体になりそれに対処しなければならない。入院時以上にセルフモニタリング・セルフケアの方法を獲得しなければならず、患者教育は重要である。

当院では2006年5月から外来化学療法室が開設された。我々は開設当初から、点滴治療時に自宅での副作用症状と対処方法を聞き、患者の状態をアセスメントし、患者個人に合った治療に関する情報や対処方法を支援することを心掛けてきた。田墨は、自己管理のための支援では患者と医療者が情報を共有し合うことは大切なことである[1)]と述べている。しかし、副作用症状は主観的であり、医療者がそれぞれの立場で患者の訴えを聞く方法では、必要な情報収集に一貫性をもたせることや患者医療者間の情報を共有することは、困難であることが推測された。多くの医療施設では、自覚症状をより客観的に評価し、医療者が共有できるような情報提供をしてもらうためのツールとして「患者用記録用紙」を使用する方法を導入している。

そこで我々は、独自の患者用記録用紙を作成することとし、患者教育の一環として取り入れた。この日記を活用することにより、医療者からの一方的な教育ではなく患者主体の医療の充実を図ることと、医療者が問題点を早期に共有し専門的知識に基づいたケアと患者教育にあたることができると考えられる。

Ⅰ．目的

外来化学療法室で作成した患者用記録用紙「私のちりょう日記（以下、日記という）」の活用状況とその効果を把握し、今後の患者教育の充実を図る。

用語の説明

外来化学療法における患者教育とは、患者自身が現在の病状や治療を理解し、抗がん剤の副作用に対処しながら日常生活を送れるよう、患者の視点に立ってセルフケア能力を高めるための支援のことである。具体的な内容は、治療スケジュール、予測される副作用と対処方法、緊急時の連絡方法などであり、各種パンフレットなどを用いて説明する。

尚、対処行動とは、副作用の対処方法の実践である。

Ⅱ．研究方法

1．研究デザイン：実態調査研究
2．対象：A 病院外来化学療法室で治療を受け、かつ調査期間中に日記を渡した患者のうち、研究の同意が得られた患者 31 名（男性 15 名、女性 16 名、年齢 37～82 歳）
3．期間：2006 年 7 月～2006 年 9 月
4．データ収集：質問紙を用いた調査
　質問項目（＊は、研究者の意図することを示す）
　　1）医療者に症状や聞きたいことを話せているか
　　（＊医療者に対する症状報告・相談内容の明確化）
　　2）日記を使用して医療者へ提示したか
　　（＊日記の記入と医療者への提示の有無）
　　3）日記の内容に対する意見
　　4）自宅で記録することでの変化
　　5）記録を続けようと思うか
　　（＊記録継続意思の有無）
　　6）治療中看護師から受けたいケア内容
5．倫理的配慮
　質問紙による調査を実施するにあたり、対象者に研究の主旨、参加の有無による不利益がないこと、得られた結果は本研究のみに使用し個人が特定されないことを説明し、書面にて同意を得た。
　回答は無記名とした。

Ⅲ．結果

質問紙調査の回収率は 31 名（100%）であった。

1．対象者の日記提供時期の背景（表 1）
　対象者の通院治療予定間隔は、1 週間 6 名、2 週間 19 名、3 週間 6 名であった。

表1　日記提供時期の背景　（n＝３１）

日記提供時期	化学療法の経験	
	なし	あり
1クール初日	8名	3名
2クール以降	12名	8名

2．調査結果

1）医療者に対する症状報告・相談内容の明確化（n=31）

「全部」22名（71%）

「半分以上」9名（29%）

2）日記の記入と医療者への提示の有無（図1）

「提示あり」19名（61.3%）

「提示なし」12名（38.7%）

「提示なし」の回答者のうち3名は、日記は記入したが『家に忘れた』『持ち運びに面倒』『見せることを知らなかった』であった。

また今回日記の記入がない患者9名の理由は、『他のノートや手帳を利用している』4名、『記入しなくても覚えている』2名、『副作用がない』1名、『面倒である』『記録を忘れた』各1名ずつであった。（表2）

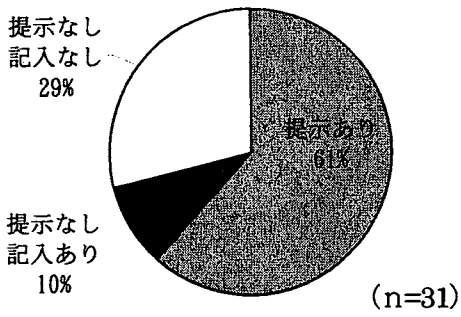

図1　日記記入と医療者への提示の有無

表2　日記を提示していない理由（n=12）

記入あり 3名	見せる事を知らなかった	1名
	家に忘れる	1名
	持ち運びに面倒	1名
記入なし 9名	他のノートを利用	4名
	面倒である	1名
	記入しなくても覚えている	2名
	副作用があまりない	1名
	記録するのを忘れた	1名

3）日記の内容に対する意見（n=22）

「記入しやすい」19名（70.4%）

「記入しにくい」3名（11.1%）

「どちらでもない」5名（22.7%）

改善点としては、文字の大きさや体重・体温の項目欄変更などがあり、その他「記入方法がわからない」「自分流に使ってみた」という意見があった。

4）自宅で記録することでの変化（図2）

「体調振り返れた」17名

「症状を伝えやすい」14名

「副作用対策を工夫」「闘病意欲増す」「特になし」各7名ずつ

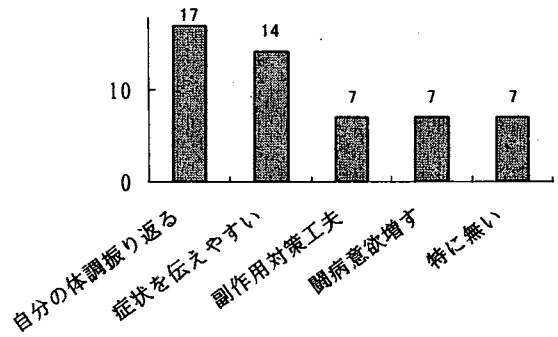

図2　記録することでの変化
（n＝22，複数回答）

5）記録継続意思の有無（n=31）

「あり」28名（90.3%）

「必要と思わない」2名(6.5%)

「どちらでもない」1名（3.2%）

6）看護師から受けたいケア内容（n=31，重複回答あり）

「生活上の注意」16名

「副作用対策」14名

「薬の説明」11名

「緊急時の判断」10名

「仕事継続の注意」8名

その他に意見は2名で、「項目すべてに対しての資料があればいい」「話しやすい雰囲気なのでこれからもっといろんな事を聞きたい」であった。

Ⅳ．考察

調査対象の71%の患者は、治療日に医療者に対する症状報告や相談内容を『全部』明確にすることができたと

判断している。しかしながら、日記使用前の調査がなく、その判断が日記の影響であることを示唆することはできなかった。

今回日記を記入したにもかかわらず医療者への提示がない患者や、日記以外のノートや手帳を利用している患者がいたことから、外来化学療法を受ける患者の多くは自宅で治療に関する記録をしていることがわかった。また、調査対象の90%の患者が、自宅での記録継続をする意思をもっていることが明らかになり、我々の患者教育の一環としての取り組みも悪くなかったと考える。

福田らは、自己管理表を継続的に記入した患者には、自分自身の身体の変化をモニタリングし、それに対して早期に対処しようとする自己管理行動がみられたこと、また、看護師の利点として、自己管理表により副作用の有無がわかり、短時間で患者の状態を把握でき効率が良いという意見があったこと[2]を報告している。今回の調査で、前述と同様の自己管理行動がみられた。さらに闘病意欲向上の効果もあることが結果として得られた。

我々看護師は、患者の記録に対する意思決定を尊重し、かつ自宅で継続的に記録することの利点を説明することは重要である。そして日記等の記録を通して、副作用と生活への支障・対処行動とその効果について、一貫性のある情報を効率よく収集することができる。その上で、患者と共に対処行動の継続的な評価を行い、患者個人の生活に合った対処方法を共に考え、支援していくことができると考える。

さらに小澤は、単に対処方法を教育するだけでなく、「自分は副作用に対処していける」という自己効力感や、「がんは，医療者と共に自分自身が治すあるいは付き合っていくものである」という意識づけを強化することは、患者が化学療法を受ける生活に主体的に取り組むことを容易にさせうる[3]と述べている。外来化学療法看護では、限られた時間にも患者の話を傾聴し、継続的な励ましと患者の支援者であり続ける姿勢が重要であると考える。

最後に、我々は開設当初から患者教育の重要性を理解し、日記の導入・継続した支援を心掛けてきた。しかし、今回の調査で、治療中の患者から看護師に対して「生活や仕事上の注意」「副作用の具体的対策」「薬の説明」「緊急時の判断」など、更なる要望があったことが明らかになった。今後、患者の求める情報を具体的に提供できる専門的知識・技術の向上に努めなければならない。

V. 結論

1. 我々の作成した日記は、調査期間中約60%の患者に活用されていた。
2. 外来化学療法を受ける患者は、日記使用により自己管理行動の発現が確認できた。
2. 外来化学療法を受ける患者は、自宅での日記等を使用した記録継続する意思をもっている。

VI. 今後の展望

本研究の調査結果より、外来化学療法を受ける患者かの要望を真摯に受け止め、患者教育マニュアル（日記運用マニュアル作成を含む）などによる看護の標準化・チーム医療の構築を図り、患者教育の充実につなげていかなければならない。

引用文献

1）田墨恵子：がん患者にとってのアドヒアランス，ナーシング・トゥデイ，19(11)，P26－25，2004
2）福田敦子他：外来がん化学療法患者の自己管理行動に対する看護支援の検討ー自己管理表の有効性，神大医保健紀要 18：P115－121，2002
3）小澤桂子：患者・家族へサポートと外来治療の評価，がん看護，8(5)，P384-390，2003

参考文献

1）梅村真佐江：外来におけるがん化学療法と看護マネジメント，がん看護，11(2)，P153-157，2006
2）松本幸絵：がん化学療法を受ける患者・家族への教育，がん看護，11(2)，P140-142，2006
3）田中登美：患者教育と援助，月刊ナーシング，25(13)，P71-73，2005